

令和3年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月16日実施)	総合評価 (3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>①確かな学力の向上(基礎学力・技術・技能の定着、魅力ある教育課程編成の実現)</li> <li>②生涯にわたる自分づくり(キャリア教育・シチズンシップ教育の充実)</li> <li>③命や人権を守る(命の授業・人権教育・安全教育の実践)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○新学習指導要領に基づいた教育課程を具体的な時間割等に落とし込み、完成年度までの道筋をたてる。(①)</li> <li>・新教育課程に合わせて、実習の改善の取組を継続し、カリキュラムの魅力化を図る。(①②③)</li> <li>○生徒の進路目標を明確化し学力の向上を図る。(②)</li> <li>・教育のICT化を推進する。(①②③)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校目標に対応した教育課程編成の実施準備をする。(①)</li> <li>・教科代表者会議を活用し、新教育課程に合わせた、具体的な授業内容の検討を行う。(①)</li> <li>・ICT活用のための新しい技術を取り入れながら、不断の授業改善に取り組む。(①)</li> <li>・外部の知見を取り入れた授業展開を実施する。(②③)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新教育課程実施のための準備ができたか。(①)</li> <li>・新教育課程に合わせた授業内容や展開について十分に協議できたか。(①)</li> <li>・ICTを取入れた指導と評価を確立できたか。(①)</li> <li>・どんな知見を取り入れ、そのことを実践した授業で、教育効果がどのように高まったか。(②③)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科代表者会議を通してICT利活用事業に合わせた授業内容の検討を行い、計画を策定した。(①②)</li> <li>・コロナ禍でオンライン授業に素早く対応し、学習活動を継続することができた。(①)</li> <li>・感染拡大防止に努めながら校外学習や企業連携など、外部の知見を取り入れた学習活動を実施する事ができた。(②③)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICT教材の充実を図り、一人一台端末を有効活用し、ICT利活用推進事業を促進する。(①)</li> <li>・情報リテラシー研修会を実施し、ICT活用能力を向上させ教育力の底上げに繋げる。(①)</li> <li>・ウィズ・コロナ時代において、外部の知見を取り入れながら、今、必要とされる技術だけでなく、次代に対応できる人間力の向上を図る。(②③)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTを活用したオンライン授業を実施したことは、コロナ禍においては評価できる。一方で、生徒の声に耳を傾け、対面授業のニーズや学習内容の理解や学力の定着という観点から、しっかりと課題を検証し、オンラインと対面授業のそれぞれの特徴を活かしながら、バランスよく行っていくことが肝要である。</li> <li>・職員研修をさらに充実させて、職員間での情報リテラシーの格差を埋める取組に期待する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全職員が研修を通して、ICTスキルを高め、一丸となってオンライン授業に取り組むことができた。今後は、対面授業とオンライン授業の特徴を精査し、生徒の理解度や学力の定着具合を検証し、場面に応じて両者をいかにバランスよく機能させるかが課題である。</li> <li>・外部人材を有効活用し、生徒の学習効果を高め、進路活動を支援する取組を今後も継続する。併せて、教職員自身も時代の趨勢を把握し、次の時代に求められる教育の在り方について考え、授業改善の取組をどのように推進するかが課題である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の興味関心を喚起し、主体的に学ぶ姿勢を培うために、ICTやオンラインを有効活用しながら、対面授業とのバランスを考え、教育効果を高めるため、一層の授業改善の取組を推進する。</li> <li>・ICT利活用推進事業の指定校として、必要に応じて外部人材等も活用して教員研修を計画的に実施するなど、教員が協議、研修する場を設け、教職員の情報リテラシーを高めるとともに、それらを生徒の還元することを実践する。</li> </ul>
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>①生徒指導・支援の充実(規範意識の定着、教育相談・部活動の活性化)</li> <li>②相互理解の促進(インクルーシブ教育の推進)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○社会マナーの定着と規範意識の高揚を目指す。(①)</li> <li>○課題を抱える生徒の支援のために教育相談会議を活用し、情報共有を行い迅速で丁寧な対応を行う。(①)</li> <li>・行事や部活動に主体的に取り組む、健康で安全安心な学校生活を送ることができるよう支援する。(②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登校指導等の体制を確立し、生徒への意識付けを強化する。(①)</li> <li>・学習や生活に課題を抱える生徒を全体で支援するため定期的な教育相談会議を行い、教員間での情報共有を行う。(①)</li> <li>・生徒会を中心に行事や部活動の活性化を図り、生徒同士の人間力を高める。(②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遅刻数や服装の乱れが減少したか。近隣の評価がどう変化したか。(①)</li> <li>・生徒の課題を職員間で共有し、課題を解決することができたか。(①)</li> <li>・生徒会行事や部活動への生徒参加数が増え、活動に取り組む意欲が高まったか。(②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校全体で遅刻指導に取り組むことで、前年より10%遅刻者が減少した。</li> <li>・SC、SM、SSWと連携をとりながら、コーディネータ会議等を定期的に行い、生徒の抱える課題解決に取り組んだ。(①)</li> <li>・生徒会役員からの意見を積極的に取り入れ、より主体的な行事運営を行えるようにした。(②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遅刻指導や冬学期間の服装指導に課題が残る。職員が一丸となって継続的な指導を行うことが肝要である。</li> <li>・課題を抱える生徒の支援のため、職員間の情報共有と組織的な支援体制を強化する。(①)</li> <li>・各部の活動内容や成果について積極的に情報発信することで、部活動の活性化を促進する。(②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活、社会生活を営む上で、時間やルールを守ることは大変重要なことである。遅刻数が減少したことは好ましいことだが、この数字が妥当なものであるかを検証し、今後も継続的に取り組み、規範意識の高揚を目指してもらいたい。</li> <li>・課題を抱える生徒に対してSCやSSWと連携し支援を行ったことは評価できる。生徒の発達状況を見極め生徒の理解と支援に努め、中途退学や進路変更を減らしてもらいたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遅刻指導や服装指導に継続して取り組み成果を上げた。学校生活で求められるルールは社会生活を営む上で当たり前のことであるということ、いかに生徒自身が認識して取り組むかが課題である。</li> <li>・課題を抱える生徒の支援の仕組みを整えるため、連携体制を構築することができた。担当だけでなく、かかわるすべての職員が生徒に寄り添う姿勢で支援にあたることできるかが鍵となる。</li> <li>・コロナ禍で低迷した部活動をはじめ学校行事等の生徒の主体的な活動の場を、より活性化させるための取組が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会生活を営む上で必要となるマナーや規範意識の定着を進めるためにも、生徒や保護者の声にも耳を傾け、納得性の高い指導を行う。</li> <li>・課題を抱える生徒の支援体制、連携体制の強化は喫緊の課題である。そのためにも職員研修等を実施し、全職員が同じ視点と適切な情報共有のもと、支援に当たることができるようになる。</li> <li>・学校行事や部活動等、生徒の主体的な行事を活性化させるために、生徒とも協議をしながら、ウィズ・コロナの時代の新しい活動の在り方を模索する。</li> </ul>
3	進路指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>①進路指導・支援の充実(進路ガイダンス・インターンシップ・職業教育等の充実)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生徒が「生涯にわたる自分づくり」に主体的に取り組むよう、進路Gと総合技術科Gによるコラボ支援を行う。(①)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループと学年が連携して計画的な進路支援を行い、生徒が自らの目標を明確に持ち、進路を考えるよう支援する。(①)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校組織が相互に連携することにより進路選択のミスマッチを防ぐ事が出来たか。(①)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTを活用し計画的な進路指導を行い、個々の生徒が自分の進路への理解を深め進路選択ができるよう支援した。(①②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインでの就職試験が増加していることから、通信環境の整備が喫緊の課題である。(①)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路未定者数が少なかったことは評価できる。進路のミスマッチをなくす進路支援のためには、情報収集力が鍵となるため、生徒と教員が一丸となった情報共有の仕組みづくりが求められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組織間の連携に基づく指導が一定の成果を収めているが、学年団との情報共有をさらに強化し、生徒の支援にあたる必要がある。また、広範囲にわたる情報収集、綿密な分析に基づく情報を適切に共有するため、教員の研修機会をいかに増やすかも課題である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路指導グループとして情報収集や分析を進める過程で、外部人材も有効活用し定期的に研修会を実施するなどして進路指導に関する情報のアップデートに努める。また、学年団と協働して指導に当たることで、進路指導に関する教員全体の能力を向上する。</li> </ul>

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月16日実施)	総合評価(3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
	②社会性の育成 (コミュニケーション・情報発信能力の向上)	・外部講師を活用し、社会の状況に適した進路支援をする。(①②) ○就業体験や高大連携事業に参加する生徒を増やすと共に、体験を通してコミュニケーション能力を高めるための支援に取り組む。(②)	・外部講師によるガイダンスや地元企業説明会を実施し、個に応じた進路支援を行う。(①) ・就業体験や大学、専門学校等の説明会に参加させることで早い段階から主体的に進路を考える姿勢を育む。(①②)	・就業体験や高大連携事業を通してコミュニケーション能力を高めることができたか。また、このことが実際の進路決定場面で有用であったか。(②)	・外部講師によるガイダンスや地元企業説明会、卒業生から学ぶ会を実施し、社会性の向上を図った。(②) ・3月末現在、就職内定者112名、進学合格者63名で、95%以上の生徒が希望する進路実現を果たした。(①)	・進学では総合型選抜の情報収集と実態の把握に苦慮した。今後は生徒、保護者との情報共有を強化する(①) ・高大連携授業やオープンキャンパスへの参加を積極的に促し、体験を通してコミュニケーション能力の育成に取り組む。(①②)	・外部と連携し様々なガイダンスを実施して、高校生のうちから仕事のついて深く知ることは大変有用である。一方で、実際に入社後や進学後に直面する課題に立ち向かい、解決する能力の育成も必要である。	・外部人材を活用し、生徒の進路意識を高め、将来に対しての具体的なイメージを抱かせる取組は有効であったので、今後も継続する。一方で、実際に社会に出て必要となるコミュニケーション力や様々な事象に適切に対応する課題解決能力等を、どう育成するかは継続的な課題である。	・コミュニケーション力や課題解決能力は一朝一夕に培われるものではなく、日々の学校教育の中で、常に意識しながら教育活動に当たるべき課題である。ICTの利活用の進む中で、新しい時代のコミュニケーションの在り方をも視野に入れながら、教員自身が個々の生徒に丁寧に寄り添い、共に課題を解決するという姿勢で臨むことが肝要である。
4	地域等との協働  ①地域連携・協働の推進(CSとしての取組みの推進・異校種間連携事業の推進)  ②開かれた学校づくりの推進(ホームページ・ポスター・各種イベントの活用)	○専門高校の特徴を地域に発信することで、本校の特徴を理解してもらう。(①②)	・限定された範囲であっても地域や社会連携事業に関わりを持ち、地域に貢献する。(①) ・魅力あるホームページや学校パンフレットを作成し、広報活動の充実を図る。(①②)	・地域と連携した取組を実践するために何を工夫し具体的にどのような貢献ができたか。(①) ・広報活動を通して地域の中学生やその保護者に本校の魅力を伝えることができたか。(①②)	・コロナの影響により生徒同士の学校間交流の機会は限られたが、TECHLABやイルミネーション湘南台などの地域連携の活動に貢献することができた(①)。 ・次年度からホームページにVRを導入するなど、学校HPの改善を図った。(①②)	・志願者数を見ると十分に本校の魅力が伝わっているとは言えない。PR方法、連携活動や学校説明会の内容や時期を見直すだけでなく、魅力ある授業づくりのための授業改善についても再考する必要がある。(①②)	・イルミネーションの設置やバンドベルのロボット自動演奏など、地域のイベントに貢献した功績は大きい。是非、継続してもらいたい。今後はイベントだけでなく、ものづくりを通じた交流や部活動を通じた交流等の可能性を模索し、更に地域と交流の活動を充実したものとしてもらいたい。	・専門高校の特色を活かして、地元のイベントに参加し、地域交流に貢献することができた。今後はものづくりを通じた交流推進や技能の継承を図り、部活動や学校行事などの生徒の主体的な活動を充実させ、魅力の発信に努める。 ・VRシステムを学校ホームページに導入するなど、新たな魅力発信の環境整備に努めた。広報活動の充実も大切であるが、部活動等生徒の主体的な活動を通じた本校の魅力発信が喫緊の課題である。	・本校の魅力を適切に発信するために、本校でこれまで培ってきたものづくりの土壌を活かし、系の垣根を越えて、地域の様々な教育資源と連携することによって、生徒が生き生きと活動に取り組むことのできる環境づくりを行う。 ・学校ホームページを充実し、学校ツイッターを開設するなどして、常にタイムリーな情報発信を行う。一方で部活動の活性化を軸に、地域との連携の場面を増やしていく。
5	学校管理 学校運営  ①信頼と期待に応える学校づくりの推進(学校運営の組織的な改善・不祥事防止研修)  ②安心で快適な教育環境の整備(教員の働き方改革の推進・施設設備の充実)  ③防災教育の推進(DIG・防災訓練による災害対応力の向上)	○職員一人ひとりが教育公務員としての自覚を持ち、学校目標の達成に努め、事故不祥事防止をする。(①) ・PTAや同窓会との連携を視野に県の教育環境整備事業をすすめ、安全で安心な学習環境を作る。(②) ・防災訓練やDIG訓練を継続し、生徒だけでなく、職員の危機管理意識を高める。(③)	・不祥事防止研修や教育活動推進PT会議を活性化し、課題意識を全職員で共有してその解決に向けて全体で取り組む。(①) ・デジタル化に伴う施設整備を円滑に行い、生徒の学習環境の整備を推進する。(②) ・コロナ禍における地域との連携の在り方や防災訓練の方法を検証しより効果的な防災教育の実施に努める。(③)	・事故不祥事防止を徹底し、新たな教育課題を見出し、全体で解決に向けた取組を実践することができたか。(①) ・教育環境の整備を推進し、生徒が学びやすい、職員が働きやすいと感じることができたか。(②) ・地域防災という視点から、被災時に備えた実勢的な対応について、生徒も職員も意識を共有することができたか。(③)	・不祥事防止会議を定期的実施し、全職員がセクハラやわいせつ事案について解決策を考えた。(①) ・PTAの協力のもと、十分なコロナウイルス対策を施しながら、文化祭の実施を支援した。(②) ・シェイクアウトを実施し避難経路の確認を行った。 ・環境委員と協力し地区の防災マップを活用して10月にDIG訓練を実施し、文化祭で発表した。(③)	・学校目標を念頭に、職員一人ひとりが不祥事根絶に向けて着実に取り組んだ。(①) ・コロナウイルス対策について、その費用対効果等を検証し、継続的に感染防止に努める。(②) ・防災訓練については、実施時期や内容を検討し、有事に活かされる訓練の実施を目指す。 ・生徒の防災意識を高めるために、継続的に環境委員と連携し、DIG訓練の内容を工夫する。(③)	・感染防止に努め安全に学校教育を継続したことや、定期的に不祥事防止会議を実施し職員の規範意識を高め、不祥事を起こさないよう取り組んだことは評価できる。 ・コロナの影響を受け、地域と共同で避難訓練を行うことができなかつたが、感染が落ち着いた時には、地域と連携した防災計画を再確認し、ともに協力しながら、防災意識を高めていきたい。	・不祥事防止会議や職員研修を継続的に実施し、職員一人ひとりの教育公務員としての自覚と規範意識を高めることができた。今後もこれまでの取組を継続して行っていく。 ・校内でコロナの感染拡大を引き起こすことなく、最少程度の感染にとどめなら、教育活動を継続することができた。今後は生徒の安全安心を第一に考えながらも、ウィズ・コロナを念頭にどのように教育活動の充実を図るかが課題である。 ・学校防災はもとより、地域の中の学校としての位置づけを意識し、地域ぐるみの防災の在り方を、連携して考えていくことが肝要である。	・定期的な不祥事防止会議を今後も継続する。その中で、管理職だけでなく、該当部署が講師を務める機会を増やし、職員自らが取組を主導する体制を作る。 ・学校教育の安全と安心を担保するためには、生徒及び保護者の理解と協力が必要である。場面に応じて丁寧な説明を繰り返しながら、適切な判断をするように努める。 ・地位と連携し防災訓練やDIG訓練などを実施する中で、発災時に地域が学校に求めることや何を高校生に期待しているのかを生徒が主体的に考える姿勢を培う。